

Following the Equator にみる アメリカの無邪気な自信の終焉

平 田 美 千 子

Synopsis: Mark Twain's final work in his travel book series, *Following the Equator*, shows the writer's diminishing confidence in the American innocence. In his earlier books in the series, he had long struggled to establish the American values, culture and history. His four travel books, *The Innocents Abroad*, *Roughing It*, *Tramp Abroad* and *Life on the Mississippi* humorously reflect Twain's "innocent" belief in "Americanism" and the nation's power represented by its democracy, technology, productivity and nature. However, *Following the Equator* does not share the optimistic expectation for the nation as America was turning its policy to Imperialism. My paper will discuss the ways in which Twain confronted the greatest ethical conflict during his travel in Australasia, India and South Africa.

はじめに

Following the Equator (1897) はマーク・トウェイン最後の旅行記である。ゆく先は大英帝国の植民地諸国、すなわち、オーストラリア、ニュージーランド、インド、南アフリカだった。つまり、「赤道に沿って」西方向へそれぞれの国を訪ねて講演をしながら、事実上世界一周をするというものである。この旅行が企画された背景には、ページ植字機への投資とトウェイン自らが興した出版社の破産のせいで多額の負債を抱えていたというトウェイン家の内情があった。旅先での講演活動と旅行記出版によって借金を返済するというのがトウェインのもくろみであった。当時のトウェインはすでに世に知られた作家であり、その地位は揺るぎのないものになっていた。旅行記は、すでに四冊出版していた。初めの *The Innocents Abroad* (1869) ほどの売り上げや評価は得られなかったものの、それに続く、*Roughing It* (1872)、*Tramp Abroad* (1880)、*Life on the Mississippi* (1883) も確実

に読者の心を掴んでいた。家庭の経済状況はさておき、還暦を迎えようというトウエインは、読者から多大の期待を寄せられる、脂の乗り切った作家だった。

トウエインが訪れたのが大英帝国の植民地なので、現代の読者としては、作家がどのように当時の帝国主義支配を捉えているのか、関心をそそられるところである。実際、この旅行記の焦点は欧州諸国による植民地支配におかれている。*The Innocents Abroad* では the New World アメリカに対する the Old World 欧州と聖地、*Roughing It* ではアメリカ中部と西部とハワイ¹、*Tramp Abroad* では再び欧州、特に中欧諸国、*Life on the Mississippi* ではミシシッピ川沿いにアメリカ南部を旅してきたが、中心主題はつねに母国アメリカだった。欧州旅行中にはアメリカのステイタスを意識し、アメリカの国家としての自信を確認する作業をおこなった。また、自分をはじめとするアメリカ人旅行者の「イノセントな」気質を良くも悪くも国民性を表わすものとしてユーモアたっぷりに描き出した。国内旅行記 *Roughing It* と *Life on the Mississippi* においては、トウエインは自らがよく知る西部や南部の歴史、社会、文化を取り上げ、the New World つまり歴史も文化もないと言われたアメリカに、文化や歴史を見出し、そのありようを描き出そうと努めている。そこには、民主主義、科学技術の発展による文明化、生産力と豊富な資源に基づく国力の増強といったものに特徴づけられるアメリカの自信と、アメリカ人らしい合理主義的なものの見方をして読者を楽しませるユーモアがみられる。考えてみれば、四つの旅行記は、トウエインに十九世紀のアメリカ人作家としての責任を認識させ、それとともに作家としてのみならず、アメリカ国民としての誇りを確立させる手段にほかならなかった。

Following the Equator は確かにその流れを汲んでいる。ただし、この作品においてトウエインは、もはやアメリカ一国に焦点を当てることはできず、これまで自らが構築してきた思想を覆されかねない危機的な局面を迎えることになる²。従来のアメリカへの強い信頼感が、帝国主義支配という現実²に直面し、大きく揺らぐのである。同時に「知らないものは知らない」と言う率直な「イノセンス」を吐露してユーモアを生み出すことはできなくなっ

た。アメリカ人作家として、もはや「知らない」では済まされない局面に立たされたのである。

Following the Equator は、トウェインや出版社の予想に反して、既刊の旅行記ほどは売れ行きが伸びず、今日に至るまで批評家の意見もまちまちである。西欧帝国主義を主題に据えながら、アメリカ史に見られる白人によるアメリカ先住民支配には触れず、また、帝国主義支配に対する政治的姿勢が一貫していないという点が、少なからず問題視されてきた。そこには、トウェインのアメリカに対する信頼感の揺らぎと、もはやアメリカ人作家として「イノセント」ではいられないという自己認識が影を落としている。

I. 十九世紀後半のアメリカの旅行と旅行記

十九世紀を通して見ると欧米における旅行の意味は大きな変化をとげた。とくに大衆観光旅行が資本主義の、そしてほどなく帝国主義の台頭の波に乗って、急速にその社会的影響力を増した。欧米諸国の人々はより気軽に世界を旅して回るようになった。それに伴い、出版界では旅行記市場が新たに開拓され、旅行記を執筆する作家が増え、多様な読者層を取り込んで成長してゆく。

観光旅行が大衆のあいだで一般的になり、ひとつの産業となりつつあった西洋諸国のなかで、欧州に比べるとやや遅れはしたが、南北戦争後、アメリカも十九世紀後半に入りその流れに乗った。そうしたアメリカの後押しをしたのは、産業の発展と国内外の鉄道や船舶の交通網が飛躍的に発達したこと、それに中産階級が台頭し増加したことである。この階級はまったくの新種であり、それに属する人々にとって、旅行、とくに欧州旅行は、娯楽の意味合いを持つばかりでなく、アメリカ人独特の目的意識を帯びるものだった。つまり、長い内戦のせいで国家も国民も疲労困憊していたので、なによりもまず国家を統合し、アメリカ国民に自信を取り戻させ、国家として再建を急ぐ必要があった。そこでアメリカ人は精神的な癒しをはかる場を欧州に見出し、由緒ある洗練された文化と歴史のなかに身を置くことを願ったので

ある。アメリカ人旅行者は欧州に足を踏み入れると、長いあいだ活字を通して想像するだけだったさまざまな文化や歴史を目のあたりにし崇敬の念を抱いた。その一方で、近代化の側面において自国が旧世界諸国と比べていかに優れているかの証拠を見出すことに情熱を傾けた⁴。そうしたアメリカ人旅行者のありようをいち早く描き出したのが、トウェインの最初の旅行記、*The Innocents Abroad* にほかならない。

観光産業の発展とともに読書界では旅行記の需要が高まり、作家のあいだでは旅行体験をものすることが流行した。その結果やがて、欧米流の旅行記が文学の一ジャンルとして発達したのは、当然のなりゆきだった。トウェインはそのジャンルの記述様式を、時に肯定的に時に冗談まじりに、自作の旅行記に取り入れた⁵。多くの批評家が認めているように、旅行はトウェインの著作活動に豊富な材料を提供し、トウェインは旅行記を執筆することによって独自の文学上の技術やセンスを磨くことができたのである。トウェインは時代の流行を敏感に察知し、当初は経済的な身入りを期待してのことだったとはいえ、結果的には作家としての成功を手に入れることができた。

多額の負債を返済するために各地で講演し、旅行記を書く計画を立てた以上、トウェインはそれまでに出した四冊の旅行記同様、*Following the Equator* についても売れ行きが伸びるだろうと期待を抱いていた。ところが、思惑通りにはいかなかった。結局、*Following the Equator* 以降、トウェインは旅行記を執筆することはなかった。

ジェフリー・アラン・メルトンはその著作、*Mark Twain, Travel Books, and Tourism: The Tide of a Great Popular Movement* において、*Following the Equator* は旅行記としては失敗作であり、トウェインは事実上旅行者としても旅行記作家としても終止符を打たざるを得なかった、と指摘している。十九世紀後半の時代において、欧米列強の帝国主義支配の広がりによって成立していた大衆的観光旅行に出かけることと、それを生み出した源の帝国主義を批判することは両立しなかったのである。メルトンは、欧米人の旅行が帝国主義支配との政治的つながりを必然的に帯びていることを認めざるを得なかったトウェインには、「もはやイノセントを演じることはできな

かった」(140)と述べている。また、旅行記という文学ジャンルに内包されるジレンマ、つまり、旅行記に書かれていることは必ずしも真実ではない、という点を、自身の旅行記の中で肯定しているトウェインが、読者に旅行記を読むことを薦めたり、みずからさらに旅行記を執筆したりできるはずもなかった⁶。確かに、知識層ではなく、一般大衆を読者層と定め、本の売れ行きを気にしていたトウェインが、読者受けを狙ってわざわざ読むに値しないことを書くことは理屈に合わない。帝国主義と密接に結びついた文化活動であるツーリズムの場で、西洋諸国の中に名を連ね、歴史的にも帝国主義支配との関係性を否定できないアメリカの国民であるトウェインが、「イノセント」ではありえない。トウェインが *The Innocents Abroad* でおもしろ半分に無邪気なアメリカ人旅行者としての自分を“sinner”と呼んだことが、三十年の時を経て、深刻な重みとともに現実味を帯びてきたのである。

II. オーストラレーシア：アメリカの成熟とその影

Following the Equator の前半のオーストラレーシアの部分では、以前の旅行記と同様に、トウェインは、訪れた場所の近代的な側面や自然の壮大さを紹介するときには、アメリカを何度も引き合いに出している。母国で見慣れた景色であるとはほめかしながら、メルボルン、アデレード、バララット、ホバートといった都市においては、公共交通機関、公共施設、教育機関、各種産業や娯楽、それに商業などの施設が整備されている様子を好意的に取り上げている。シドニーで利用した鉄道については、清潔感があって合理的な列車の車両を「アメリカ式」、荷物の超過料金の支払いが面倒なところを「ヨーロッパ式」と表現する⁷ (152)。ニュージーランドの列車の乗り心地を快適だとほめたあとすぐに、「アメリカ以外の国でこれほど合理的に作られた車両は見られない」(318)とお国自慢も忘れていないのである。

オーストラレーシアの描写では、トウェインは何度も「アメリカ的」、「イギリス的」という表現を使っている。トウェインによれば、アメリカ人はシドニーの街が予想に反してずいぶん大きいということに驚くばかりでなく、

「その細部がアメリカ風に設えられたイギリス的都市だということ」にも驚く。「メルボルンでは、アメリカの特徴がより色濃くなる。建築様式を見てもたいていアメリカ式で、メルボルンで一番立派なビジネス通りの写真を見れば、アメリカの大都市のそれを見ているような気持ちになるだろう」(125)という。また、オーストラレーシアの人々について、「衣服、乗り物、生活習慣、英語の発音や抑揚、見た目といった点において、アメリカ人と比べて目立って違うところがあるようには見えなかった」(129)し、人付き合いの仕方や食卓のリラックスした雰囲気にも「アメリカ的」な印象を受けたと書いている(130)。オーストラレーシアにおける白人の文化や文明を取り上げるとき、トウェインの意識の中で、オーストラレーシアはその生み親にあたるイギリスの副次的地位にとどまり、まだ「オーストラリア的」「ニュージーランド的」と評されるほどには成熟していなかった。一方アメリカは、イギリスやヨーロッパ諸国と肩を並べる地位にある国家として捉えられているのである。

トウェインは、オーストラリアの土地と歴史の特徴がアメリカと似ている点に注目した。十九世紀当時は、広大なオーストラリア大陸のほとんどが、まだ人跡未踏の自然環境の厳しい野生の地だった。一方、かつて野生の地だったアメリカには、「いたるところに人が暮らすにほどよい気候と肥沃な土地がある」(116)。オーストラリア大陸は、アメリカよりも目新しく、野性的なパワーに満ちあふれ、今後もさまざまな発見が期待されるような天地だった。トウェインは「オーストラリアの歴史は、実際にあった出来事ではなく、まるでとても上手くできた嘘のように読める。しかもそのどれもに新鮮みがあって、陳腐なところがない。驚きと冒険と不調和と矛盾と信じ難いことに満ちあふれているのである」(169)と書いているが、十九世紀後半に入りアメリカと同じような歴史を辿りつつあるオーストラリアに対しては、アメリカの弟分であるかのような親しみを覚えていたことはまちがいない。

Following the Equator には、トウェインのほかに「イノセントな」あるいは無礼なアメリカ人旅行者は登場しない。トウェイン自身、訪れた先々では実際に行儀よく振る舞ったようだ。ところが、*Following the Equator* の

トウェインの文章には、「イノセントな」旅行者にありがちな偏見とも取られる記述がたびたび現われる。トウェインやアメリカ人旅行者にとって、オーストラリアの先住民であるアボリジニーは、博物館の展示物のようにまず目にすべき興味ある対象であると述べている箇所は、そのいい例といえよう。

カンガルーもエミューもカモノハシも講師も先住民もまったく見なかった。[...]「先住民」ではなくアボリジニー、つまり「黒い肌の人々」をまったく見なかった、と言うべきだった。今日までついに一人も目にするのができなかった。大きな博物館では、ほかの珍しいものはなんでも見ることができるのに、旅行者が一番見たいと思っているものは、けっして展示されていないのである。わがアメリカにもずいぶんたくさん博物館はあるが、アメリカの先住民は展示されていない。これはまったく不合理なことなのだが、いままではそんなことは考えたことがなかった。(155)

ここでトウェインは、博物館という公共施設が欧米ではツーリズムとともに発展し、まさに帝国主義的な文化の産物だったことを意識していなかったのだろうか。いずれにしても、人道的に考えれば、人間を博物館に展示するなどありえないことだが、ブラックユーモアのつもりで書かれたらしいこの文章には、ただの「イノセント」では済まされない薄気味の悪さが漂っている。

上記のような「無邪気な」記述とは矛盾するかのようには、オーストラレーシア訪問の部分においてトウェインは、大英帝国支配下の植民地で行われた白人の残虐行為に対して手厳しい批判を加えている。クイーンズランドのカナカ人、フィジーの先住民、オーストラリアやタスマニアのアボリジニー、ニュージーランドのマオリ族といったオーストラレーシアの先住民だけでなく、大英帝国からオーストラリアに送られた流刑囚についても、白人による迫害の歴史として報告している。トウェインは、流刑囚たちがいかに非人道

的扱いを受けていたかを紹介しつつ、次のように指摘している。「四十年以上もこうした囚人たちの状況を知りながら、それを変えようとしなかった国が、より高度な文明へと華々しく発展しつつあるなどと我々は断じて認めるわけにはいかない。」(121) さらに「世の中には滑稽なことが数多くある。白人の自分はほかの野蛮人よりも野蛮ではないという考えもそのひとつである」(213) と続き、オーストラレーシアについての件りが終わりに近づくと、トウェインは、白人の残忍性の原因のひとつに分別の欠如をあげ、白人を「犯罪人」(267) と呼ぶにいたるのである。

オーストラレーシア先住民についてはかなりのページ数を割いているのに、アメリカ先住民に関しては直接的な記述が見当たらないのは、いかにも不自然だという印象は免れない。作品後半のインドを取り上げた部分では、トウェインはカースト制度にふれながら、アメリカの奴隷制を想起して率直な見解を書いているだけに、不可解である。中垣恒太郎氏は、オーストラリアの件りでアメリカについての問題意識が表面に出ていないのは、「トウェインにとって奴隷制度の問題は身近なものであったが、先住民は身近な存在ではありえなかったこと、そしてアメリカ合衆国における植民の問題を突き詰めていくなれば、アメリカ人としてのアイデンティティを揺るがしかねない危険があったからではないか」(34) と指摘している。トウェインが実際どういうつもりだったか真偽を確かめるすべはないが、オーストラレーシア先住民について言及したとき、トウェインの脳裏にアメリカ先住民の問題が浮かばなかったとは考えにくい。少なくとも、トウェインが白人による植民の歴史を批判するとき、そこにアメリカが含まれていることは確かである。何度も使われる「白人」という表現にアメリカ人が含まれていることは、「白人」を“we” (212) と呼んでいることから明らかだろう。また、*Following the Equator* の南アフリカについてふれた部分で「この地球上のあらゆる政体に属するあらゆる土地は、もちろんアメリカも含めての話だが、もとはほかの国や民族から、まるで洗濯物のようにくすねてきたものなのである」(623) と喝破していることも付け加えておきたい。

トウェインは、オーストラレーシアにおいて、十九世紀後半の世界におけ

るアメリカの国力を実感し信頼感を強める一方で、西欧帝国主義的な支配が抱える深刻な問題をしっかりと受けとめざるを得なかった。

III. インド：アメリカの自信の揺らぎとイノセンスの終焉

Following the Equator 後半で、トウェインが取り上げるインドにおけるイギリス主導の近代化は、オーストラレーシアでよく例に挙げられた都市計画などのような有形のものではなく、西洋的価値観に基づく人道的改革である。たとえば、サティー（妻の殉死の慣習）や「女の赤ん坊を殺してしまう」という旧習の禁止や、強盗殺人組織サグの撲滅などがそうだ。トウェインは、イギリスによる侵略が結果としてはよかったとでもいうように、「ヘースティングスのしたことのなかには決して洗い流すことのできない汚点を残したものもあるが、それでも彼はイギリスのためにインド領を確保したし、そのことは結局、長いあいだ非道な圧政と迫害に苦しんできたインド国民にとってもいい結果をもたらしたのである」（506）と書いている。それに、「インド駐在の少数のイギリス人は実に容易に、たいした摩擦も起こさず、圧倒的多数のインド人を統治している。それは、柔軟な対応と教育と公正で人権を重んじる法律——住民に対する公約は必ず守った——に従ったすぐれた行政能力によるものだった」（518）との見解を述べて、イギリスがインドを首尾よく統治していることに感心している。その一方で、「毎年ヴィクトリア女王が公益事業を行ったインドの王侯貴族に騎士の称号を与え、祝砲をあげている」（380）ことを紹介している。そして、このようなやり取りが異なる文化、歴史的価値観を持つ二つの国の支配者同士で行われていることを「現代においては、王族たちは騎士の称号を授かり祝砲をあげてもらうために、工場、学校、病院をつくり、改革を広めている」（385）と言って皮肉っている。

トウェインは、オーストラレーシアでは白人の植民地支配を厳しく批判したが、インドではそうした姿勢はあまり見られない。フレッド・カプランは「当時トウェインは、反帝国主義的な姿勢をはっきりと示していたわけでは

なかった。彼は英国文化を崇敬していた。イギリスでの生活が心底気に入っていてもいた。イギリスは彼を暖かく迎え入れてくれたし、彼の作品は好評を博していた。トウェインはイギリスの社会のつくりや政治およびその階級制を支持していた」(9)と述べているが、大英帝国支配下のインドについて明確な帝国主義批判の姿勢を表わしていない理由としては、トウェインのイギリスに対する個人的愛着を忘れてはならないだろう。オーストラリアの人々がイギリスに対して敬愛の念を抱いていることを「耳に快い」と書き、また次のように、英国の「比類なき」歴史に敬意と愛着を示している。「イギリスの美しさは唯一無二である。ほかにひとつとして似たものはない。[...]そこかしこにある遺跡、そしてそのどれもが熟した夢のような歴史のペールをまとっているのである。しかも、その美しさは比類なく、イギリスだけのものなのである。」(282)

インドでのトウェインは「明確な反帝国主義者」とは言い難い。確かに、歴史、文明、文化、自然といった点で果てしない広がりや厚みを持つインドを数ヶ月で理解し、その社会について明確な意見を持つことは不可能に近い。トウェインは、インドが抱える問題について一方的な立場をとることはできなかった。インドという国を目のあたりにして圧倒されたトウェインがまず述べた感想は、「インドはこの世に二つとない国だ。壮大で堂々たる特色を備えている唯一の国だ。[...]その驚異はインドだけのものだ。その特許が侵害されることは決してない。模倣は不可能である。その規模の大きさと風格を考えてみよ。しかもほとんどが奇妙で異様と見えるのである」(397)というものだった。

トウェインはセイロン（現スリランカ）で、「どことなくみだらな印象をうける黒や褐色の肌の露出」(339)や「なにか神秘的で古めかしさを感じさせる、くすんだような重々しさや寂寥感」(340)をいかにも東洋的なものだと捉えている。当時の欧米人に一般的なこのような「東洋的な」イメージには無邪気なものがあり、トウェインはこの幻想的なインドと、貧困や古い習慣に苦しむ人が国民の大多数をしめるインドの現実とのあいだを行ったり来たりするのである。

セイロンと同様、ボンベイ（現ムンバイ）でも「東洋的な」シャワーを堪能したが、その興奮のさめやらぬうちに、トウェインはインドの不合理な現実、人種差別による暴力沙汰を目撃する。トウェインが滞在するホテルの支配人らしきドイツ人が、インド人の従業員をなにかいけないのかも告げずにいきなりぶったのである。そのとたん、トウェインは自分の少年のころを思い起こす。まだアメリカに奴隷制が存在していた時代のことである。自分の父親が「害のない奴隷少年のルイス」を手ひどく扱ったことを告白し、その時の気持ちを打ち明ける。また奴隷の男性が所有者に殺される場面についても「どうしてそう感じたのか説明できるほど経緯が分かっていたわけではないが、とにかくその場面は痛ましいものであり、どこか間違っていることだけはわかった」（352）と当時の印象を書きとどめている。唐突に始まった告白の調子はいたって深刻なものである。この場面は、トウェインの意識中の帝国主義とアメリカの奴隷制の関わりを示すものとして、複数の批評家が取り上げている。¹⁰

トウェインにとってはサグやサティーのみならず、古来のカースト制度も、インドにおいて最も不合理なもののひとつだった。カースト制度はインド社会と文化に深く根づいており、独自に機能にしているように思われた。いちばん不可解なことは、インド国民が概してカースト制度に甘んじている様子だった。インド人の召使いが雇い主の部屋の前の吹きさらしの廊下に「しゃがみ込んで主人が用を言いつけるのを待っている」（467）光景を見てからというもの、その姿がトウェインの脳裏に焼きついて離れることはなかった。「彼の姿は私の記憶の中で決してほやけてしまうことはないだろう。インド人の諦観、あらゆる不合理や困窮や災難にもじっと耐えている件りを読むときはいつも、あの召使いの姿が頭に浮かんでくる。彼は私の中で悩めるインドを象徴する存在となっているのだ。」（468）

またトウェインは、長く重厚な歴史を持つインド社会における多様な宗教について理解を深めようとしたが、納得のいく結果は得られなかった。「インド人は不思議な人々だ。彼らにとって、人間の命以外のすべての命は神聖なのである。害虫の命でさえ神聖なので、殺すなどもつてのほかである。

[...] それなのにインドにはサグによる犯罪やサティーが現存する。インドはまったく理解し難い国である。」(503) よくも悪くも近代文明の恩恵のもとで生活をし、合理的な分別を備えたトウェインにとって、ヒンドゥー教をはじめとするインドの諸宗教の教義や人々の信仰心は、どうしても納得できないものだった。

「不可解な」(451) インドをあとにして、南アフリカを訪れると、トウェインは再び帝国主義にひどい嫌悪感を催す。南アフリカでは、イギリスだけではなく、欧州諸国が加わり醜い植民地争奪戦が展開されていた。彼の地では、インドに存在したような余計なベールはかかっておらず、先住民の文化を抑圧し、労働を強要するような、聞くに堪えない非人道的な行為が目前でくり広げられていた。ここで再びトウェインは、西洋人のやり方を「犯罪」と呼んではばからない。

規模の大小を問わず現在のすべての民族や国が領有している土地は、かつては強奪の対象だった。イギリス人やフランス人、それにスペイン人がアメリカにやってきたとき、アメリカの先住民たちはすでに長いあいだ互いの領地を示す洗濯用ロープを侵害し合っていた。アメリカ中の土地が何回も繰り返し盗まれてはまた盗み返されていたのだ。イギリス人とフランス人とスペイン人はその土地を根こそぎ横取りしようとやってきた。彼らは首尾よくなし遂げると、今度は互いの取り分をめぐる争うことにやっきになった。ヨーロッパとアジアとアフリカ、いずれの大陸でも幾度となく土地は盗まれ続けてきた。長いあいだ続いていくうちにやがて犯罪は犯罪ではなくなり、美德となるのだ。(623-24)

白人による残虐非道な行為はもとより、人類全体の略奪の歴史にまで思いを馳せ、当時の世界情勢について語り、未来を占うトウェインの口調はますます陰鬱なものになってゆく。

インド以降の件りについて言えば、トウェインは従来のように無邪気に訪問した土地とアメリカを比較対照することをやめてしまう。インドでは何も

かもが違いすぎて、比べる意義が見出せなかったのだろうか。あるいは比べても、思うような結論を引き出せないと感じ、あえて控えたのだろうか。また、南アフリカでは、ページ数の制限上、取り上げる余裕がなかったのか、それとも、その時点に至って「無邪気に」アメリカを取り上げてははられなくなってしまったのか。いずれにしても、トウェインにしろアメリカにしろ、もはや「無邪気」を免罪符として掲げることなどできるはずもなかった。アメリカの場合は、西洋諸国の一員として、その影響力に責任を持つべき時期を迎えていたのである。

結 び

一八九五年から一八九六年にかけて世界を一周した講演旅行以来、トウェインは旅行記を書いておらず、*Following the Equator* がトウェインの最後の旅行記になった。この旅行に出る前の約十年間は、講演依頼をずっと断わり続けていたこと¹¹、また、年齢からくる体力の衰えを深刻に受け止めており、経済的困窮という要因がなければ旅行はしないと¹²言っていたこと考えると、トウェインが破産の危機に陥ったのは、本人にとっても読者にとってもむしろ幸運なことだったといえるかもしれない。おかげで、否が応でも旅行に出なければならなかったし、西欧帝国主義という重要な問題に正面から向き合う機会を得ることができた。確かに、帝国主義全盛期の外国旅行には政治的意味合いが付きまとうが、それでも海外に出ないと見えないことがあるのも事実である¹³。

初めてハワイで帝国主義支配の影響下にある文化や社会を目のあたりにしたときは、まだトウェインはその問題について取るべき姿勢を決めかねていた¹⁴が、*Following the Equator* 執筆以降、欧米による帝国主義政策に対する考えを積極的に述べるようになる¹⁵。欧州諸国による植民地争奪は言うまでもなく、さらにはアメリカが帝国主義政策に傾いてゆくには断固として反対の姿勢を貫いた。また、トウェインは西洋の価値観を支配するだけでなく、長らく植民地拡大のための道具として使われてきたキリスト教に対する批判

的な見解も著すようになる。リチャード・ブリッジマンが「トウェインは宗教問題について公言をすることをずっと避ける傾向にあった。しかし、*Following the Equator* が出版された年から、宗教問題についての考察を始めたのであった。その結果が匿名の著作 *What is Man?* として世に出ることになったのである」(131)と指摘しているが、晩年の複数の作品に登場する「サタン」を思い起こせば、*Following the Equator* がほかの四冊の旅行記と同様、トウェインの執筆活動に与えた影響を充分にうかがい知ることができるに違いない。

Notes

¹ *Roughing It* の後半のハワイについての部分は、トウェインが一八六六年に通信員としてサンドイッチ諸島を訪れたときに書かれた通信文がもとになっており、編集されてはいるが、内容的にはほぼそのまま転用されている。通信文を一冊の本としてまとめたものとして、*Mark Twain's Letters from Hawaii* (Ed. Grove Day. Honolulu: U of Hawaii, 1975) がある。

² *Tramp Abroad* や *Life on the Mississippi* ですでにその徴候が表われていたともいえるが、他の四冊の旅行記と比べ、五冊目の *Following the Equator* ではその違いが明確に表われている。

³ 「南北戦争後のアメリカ人観光客は、戦争前とはずいぶん違った性質を持つようになった。典型を挙げると、上品とはいいがたく、長い歴史のある伝統的生活様式には慣れておらず、たいていは古典的教育には乏しく、また多くは母国語以外の言語は話せない者達であった。つい最近になって財産を、しかも大概巨額の財産を受け継ぎ、自己信頼、母国信頼が基本で、過去の尊厳よりもむしろ現在の満ち足りた生活を重視する傾向があった。好奇心旺盛で活動的で貪欲、それに懐疑的であると同時に尊敬の意を惜しまぬ性質、そしてまったく物怖じするところがなく、いかにもそれとわかるように『アメリカ的』であった。」(Steinbrink 279)

⁴ 詳しくは、Steinbrink 280–84; Stowe 6–8; Melton 21 を参照。

⁵ Melton 30–41; Stowe 13–15 を参照。

⁶ Melton 165–66; Nakagaki 36 を参照。

⁷ 以下 *Following the Equator* からの引用はページ数のみにて記す。

⁸ Igawa 56 を参照。

⁹ 「トウェインのオリエンタリズムの特徴には、まず黒や褐色の肌がかもし出すエキゾチックな雰囲気があり、それとわかる夢幻的なところ、つまりどこか遠方の退廃しつつある世界であるという感じもまた欠かせぬ特徴である。」(Gillman 202)

¹⁰ 「肌の色による人種的分類の問題はトウェインの南北戦争前の過去と帝国主

義の現在との間の最終的に重要な関係を強く形作っていた。」(Gillman 205) ; 「トウエインにとって、アメリカとヨーロッパの帝国主義は、アメリカの白人による黒人の扱いと切り離すことができない、いわば黒人差別の国際版であった。」(Kaplan 8)

11 Kaplan 3 を参照。

12 Bridgman 121-22 を参照。

13 この旅行の意義として、井川、中垣両氏はそれぞれ「地球規模の視点」(Igawa 57), 「マクロの視点」(Nakagaki 36) と表現する, 世界を見渡す広い視野をトウエインが獲得したことを指摘し, それが晩年の未完の著作“The Chronicle of Young Satan” (1987-1900) の「サタン」の人物像の形成に大きく影響を及ぼしたとしている。

14 ハワイの通信文には欧米列強から派遣された宣教師について批判的な記述がある。ただし, 宣教師の仕事をまったく否定するほどではない。

15 Hawkins 35 を参照。

Works Cited

- Bridgman, Richard. *Traveling in Mark Twain*. Berkeley : U of California P, 1987.
- Gillman, Susan. “Mark Twain’s Travels in the Racial Occult : *Following the Equator* and the Dream Tales.” *The Cambridge Companion to Mark Twain*. Ed. Forrest G. Robinson. Cambridge : Cambridge UP, 1995. 193-219.
- Hawkins, Hunt. “Mark Twain’s Anti-Imperialism.” *American Literary Realism* 25 : 2(1993) : 31-45.
- Igawa, Masago (井川眞砂). 「大英帝国植民地への旅-『赤道に沿って』世界を一周するトウエイン」『マーク・トウエイン研究と批評』4(2005) : 30-37.
- Kaplan, Fred. Afterword. *Following the Equator and Anti-imperialist Essays*. By Mark Twain. Ed. Shelley Fisher Fishkin. The Oxford Mark Twain. New York : Oxford UP, 1996. i-xvi.
- Melton, Jeffrey Alan. *Mark Twain, Travel Books, and Tourism : The Tide of a Great Popular Movement*. Tuscaloosa : U of Alabama P, 2002.
- Nakagaki, Kotaro (中垣恒太郎). 「サタンとエンジェール-『赤道に沿って』から『不思議な少年』へ」『マーク・トウエイン研究と批評』4(2005) : 51-61.
- Steinbrink, Jeffrey. “Why the Innocents Went Abroad : Mark Twain and American Tourism in the Late Nineteenth Century.” *American Literary Realism* 16 : 2(1983) : 278-86.
- Stowe, William W. *Going Abroad : European Travel in Nineteenth-Century American Culture*. Princeton : Princeton UP, 1994.
- Twain, Mark. *Following the Equator*. 1897. Ed. Shelley Fisher Fishkin. The Oxford Mark Twain. New York : Oxford UP, 1996